

野圭二・訳

オレン・アドラー

RANS-SIBERIAN EXPRESS

ベリア横断急行



シベリア横断急行

ウォレン・アドラー

訳者 中野圭二

1978年8月31日 初版発行

発行者 角川春樹 発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見 2-13-3

電話 東京(03) 265-7111 (大代表)

Printed in Japan 郵便番号 102 振替 東京3-195208

印刷 旭印刷 製本 鈴木製本 0397-791086-0946(0)

シベリア横断急行

TRANS-SIBERIAN EXPRESS

by

Warren Adler

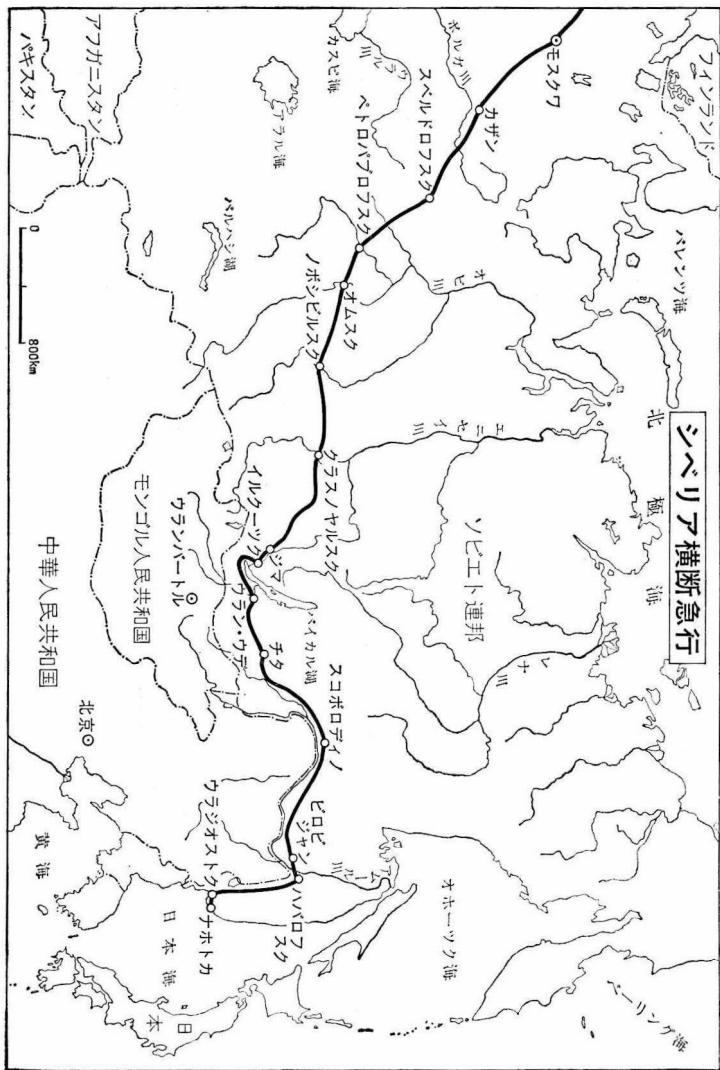
Copyright © 1977 by Warren Adler

Japanese translation rights arranged with
Scott Meredith Literary Agency, Inc., through
Japan UNI Agency, Inc.

わが三人の息子

デビッド、ジョナサン、マイケルに

シベリア横断急行



登場人物

アレックス・カズンズ……アメリカ人医師

アンナ・ペトロブナ・ワレンチノフ……イルクーツク大学歴史学教授

ビクトル・モイセイエビッチ・ディミトロフ……ソ連共産党書記長

マクシム・セルゲイエビッチ・グリベツキー將軍……ミサイル専門家

ブルガコフ元帥……赤軍最高司令官

フョードル・ペトロビッチ・ゼルドビッチ……KGB機関員

イワン・レオニドビッチ・ヤシェンコ……KGB、ゼルトビノチの助手

ミハイル・モイセイエビッチ・ギンズバーグ……ユタヤ人乗客

ベラ……ミハイルの妻

イワン・ワシリエビッチ・ゴドロフ……元囚人の不具者

トルベツコイ夫妻……ソ連共産党役員とその妻

ウラジミール……夫妻の子供

アルバート・ファーマー……在日外モンゴル・イギリス大使館員

ケネス・マクバレン……オーストラリア人

ミス・ピータスン……アメリカ人女性

ターニア……ロシア号乗客係

きらきらとまばゆいばかりでいっこうに温^{ぬく}りのない早春の夕暮れの陽差^{ひざし}しが、樋^ひ嘴^{づい}に円柱というゴシック様式まがいのヤロスラフ駅背後に低く忍び寄った。折りしも一台の黒塗りのジルが駅正面に滑らかに停^{とど}まった。公用車らしき最高級リムジンを見て警備に立っていた警官は緊張する。

前部座席に乗っていた運転手と相棒は、いずれも小さな眼をし頬骨^{ほおほね}の突き出たスラブ人である。彼らはそろって車から降り、立っていた警官と二言三言かわした。それから自動車にとって返し、トランクから数個の手荷物を引っぱり出し、大股^{おほまた}に、急ぎ足で建物のなかへ消えた。すぐに二台目の車チャイカが停まった。ダークスーツに身を固めたいかめしい長身の男たちが五人、自動車から飛び出して散った。うち二人は正面玄関の両脇^{わき}に位置を占めて油断なく眼を配り、他の連中はさらに進んで、一か所に群がっている人だかりのなかに紛れこんだ。

ジルの車内では、アレックス・カズンズが時計にちらっと眼をやった。四時十五分だ。列車は五時、それも、定時に発車する、とゼルドビッチは自信たっぷりに請け合ったものだ。

「こまかい点はよく言いつけておいたから心配はご無用だ」とゼルドビッチは保証した。

「それはどうも」アレックスはロシア語で答えた。ゼルドビッチを甘く見るのは禁物だ。

バルビクラに近い別荘からここまでは何事も起こらなかった。六十九歳になるソ連共産党書記長ピクトル・モイセイエビッチ・ディミトロフは昼食の席ではたいへんくつろいでいた。彼は血色がよくなる

につれて食欲もどおり、深いスープ・ボウルに入ったボルシチのお代わりをただけでなく、黒パンやどろっとしたサワークリームなどもたらふく詰めこんだ。薬物療法が功を奏していることは確かだった。アレックスはグラフに現われた病状の好転ぶりや、ここ六週間の絶え間ない診断や観察や治療内容を検討するにつけても、医師としての自尊心は満足させられるのだった。この病気はどんなにうまくいったようにみえても、気を許すことができない、まるでジャングルを跳梁する獣のように抜け目がない。急性骨髄性白血病という病気は、ディミトロフの血液のなかで急激に増殖する白血球と迅速に弱っていく赤血球とが眼に見えない極微の戦いを繰り広げているのである。しかも現実には彼は赤血球数の減少というところまでいったのだ。ところがいまのディミトロフは以前の鋭さを回復し、アレックスが初めて会ったときの、陰うつな狂気じみた様子は跡形もなかった。

昼食では、給仕がこんがり焼き上がってバターのしたたる一尾の大きなスズキをささげ持って入ってきた。ディミトロフは子供のように得意満面でその到着を見守った。別荘の裏手数百メートルのところをモスクワ川がゆるやかにくねっているが、アレックスはディミトロフにふたたびそこで釣りを始めることを許可したのだった。ディミトロフ書記長にとっては、権力を振るうということを除けば、魚釣りは夢中になれる唯一のものだった。釣りができるようになり、書記長の快活さがよみがえったのを見て、アレックスは、一時的にせよ、ディミトロフを墓場から奪還したことを実感した。

アレックスはその魚をちよつとついただけた。これから出立しようとしているシベリア旅行のことを考えると、不安もあったが、さすがに興奮で胸がいっぱいだったのだ。もつとも、もし事情が違っていたら、さしずめ、ノスタルジアの生み出すさまざまな感興に身をゆだねながら、時間をさかのぼっていき、来たるべき冒険の神秘にたいして心の準備をしているところだろう。「そこは魂の遺産なんじゃ」とシベリアの古狐の祖父なら言うところだ。けれどせっかくのシベリアの旅も自由を拘束されるのでは、なんとなくそぐわない。シベリアの旅とは本来そういうものじゃないような気がする。アレッ

クスは魚を見下ろした。とけたバターがしたり、皮がかりかりに焼けて光っているが、いまのアレックスには食欲をかきたてられるか疑問だった。

「うまいぞ、クズネツォフ。食べてみたまえ」とディミトロフはナイフを突きつけて命令した。口のわきを、はみ出したバターがたれている。アレックスはディミトロフについて疑っていることがあったけれど、彼の健啖^{けんたん}ぶりには一も二もなく満足し、喜んだ。じつはいまましいことに彼の心は二つに引き裂かれていた、つまり、この男にたいする奇妙な愛着とこの男が企てている行為についての知識——それはアレックスの頭にいつともしれず入りこんでいた——が熾烈^{しりゃく}な戦いを演じていた。それとも、彼の思い過ごしということもありうるだろうか？ 人物の出入り、聞きかじりの情報、それにディミトロフ自身が不思議に否定しなかった事実や短い告白も、結局欠陥ブリズムを通して見たゆがんだ映像にすぎなかったのだろうか？ おれは医者だぞ。政治とは無縁な人間だ。おれをこんなことに巻きこむ権利はないはずだぞ、と彼はテーブルの向こうにいるディミトロフに叫びたい気持ちだった。翅^{はね}の先がほんのちよつと蠅^{ばち}取り紙に触れたばかりに逃れられない運命の虜^ことなった一匹の蠅と同じように、彼もいま毘^ちにはまったのだ。

「なぜ時間のかかるシベリア経由で帰国しなくてはいけないんですか？」と彼は訊いたものだった。「ずっと早い飛行機というものがありませんが」

「何を言っておる」ディミトロフの穏やかな口調は、ブランデーを勧めているのと変わらなかった。「みすみす見逃す気かな？ 一生のあいだに好機はそうあるものじゃないぞ。ロシア人である以上、自分の過去に興味を持たないものはいないはずだ。せつかく来たんだ。ばかなことは言わんで、ぜひそうすることだな」

「でも家内が——」アレックスの対応はなまぬるく、抗議にはほど遠いものだった。妻のためというのは彼の場合はなんら理由にならなかった。むしろ、「私の命が問題なんです」と言ったほうが正確だ

ったかもしれない。

「祖先の地を見ておくのは悪くないぞ」とディミトロフは言い張った。そのことばに真理があり、それが乾燥した火口（ほくち）にマッチの火をつける効果があることを心得てのことだ。アレックスが祖父の逃亡の地を見たいとかねがね思っていたのは事実である。もっとも、祖父の逃走は物理的なものとどまった心のなかでは、老祖父は実は一度もシベリアを去ってはいなかった。

「いずれまた来ますよ」とアレックスは口のなかでもぐもぐ言った。「次回に譲ります」

「なにをばかな」ディミトロフは言った。「わしからのプレゼントなのだ。わしがしてもらったことを考えれば当然だろう」

こいつもしたたかな古狐だ、とアレックスは思った。なぜほんとのことを言わないのだ。おまえは知りすぎたのだと。おそらくおれを出国させる気はないのだろう。

「ここで一週間帰りが遅れたって、どうってことはあるまいよ」

彼が自国アメリカを出発したのは六週間前のことだった。

「党中央委員会政治局会議は七週間後に開かれる」とアメリカを発つ前、國務長官はくどいほど何度も念を押した。「それまではディミトロフの命をなんとかしてでももたせてもらいたい」と言いたいところだったのだろうが、國務長官だけあってさすがに外交的婉曲（えんきよく）法が身についている。むろんアレックスはその意図を察し、いま任務を全うしたのだった。思い返してみると、大統領も國務長官もあまりにお人よしで無能に見える。二人ともディミトロフにまんまとだし抜かれたのだ。悪くすると、アレックス自身もそれに一枚かんでいると見なされるおそれさえある。それなのに、この旅行が彼の成功にたいする存分な報酬だとは笑わせる。わしが大量殺戮（きつりく）を準備するあいだ、シベリア原野を驀進（もくしん）する移動監視房にお入り願いたい、というのが真意ではないのか？ おれには豆粒（まめつぶ）ほどの脳みそしかないと思ってい

るのか。突然、かの親愛なる妻——退屈（たいくつ）で苛々（いら）させられる情愛の薄いジャニス——との再会が、ほとん

ど待ち切れなくすら思えてきた。

政府は最初アレックスを見つけたとき、その幸運にさぞかしにんまりしたことであらう。ロシア語の話せる白血病の権威などそうざらにいないものではない。それがなんとつい眼と鼻の先の国立保健衛生研究所にいたのだ。しかし彼は頑として引き受けようとしなかった。ほかにいもうなものじゃないか？ 彼は政治はごめんだったし、力を背景とした強国同士のばかげた駆け引きにはうんざりしていた。彼に行動を起こさせる基盤は、人の生命の維持と苦痛の軽減にあった。事実、意図的に政治には関心を持たないようにし、専門領域以外のものはいっさい遮断した。人間は愚かさのゆえに非常に多くの不幸を自ら招いている。人間のつくる社会が自分たちのためになっているとは思えられなかった。が、それは政治家の問題だ。自分の手にあまる問題にまでいちいち胸を痛めてはいられない。少なくとも自分の専門分野において、彼は敵を識別しそれにはしぼることができた。それ以外はことごとく瑣事に属する、と彼は信じていた。ところがそうだった自己欺瞞はモスクワでの六週間の出来事によって、微塵に打ち碎かれてしまった。

ディミトロフの体力の回復に伴って、狡智さもどってきた。いまましい話だが、彼はロシア人の琴線——祖先——に巧みに訴えた。思えばロシア人はなんとという先祖執着の強い民族だろうか。いまでもなお、生まれてきた子供は例外なく当人のと父親のと二つの名前を与えられる。「アレクサンドル・アレクサンドロビッチ・クズネツォフ」というのが、アレックスの本来の出生証明書にあった名前である。父の猛反対にもかかわらず、それをアレグザンダー・カズンズと変更したのは、身を立てて行く上で明らかに実際上の利益があったからだ。けれど生まれてこのかた彼の幻想のなかに組み入れられてきた父祖伝来の遺産を変えるわけにはいかなかった。シベリア、それはたび重なる追憶の嵐にさらされつつ成熟した神話であった。

祖父は子供のときロシア皇帝の刑罰の網に引っかかり、シベリアへ送られた。シベリア横断鉄道敷設

の労役に従事し、そのおかげで刑期を短縮され、その後、イルクーツクに腰を落ち着けた。感傷的な誇張癖のある連中が「シベリアのパリ」と名づけたところである。数年間そこで辛抱したのち、祖父は女房と幼い息子を伴ってアメリカに逃げた。アレックスが物心つきはじめるときから、そういった若いころの苦難、絶望、危険、逃亡の話をしては、アレックスを魅了したものだ。大きくなると、アレックスは地図の上のほぼ北緯五十五度線に沿ったシベリアを見つけることができるようになった。面積は千三百万平方キロで、アラスカを含む合衆国全土と西ヨーロッパのすべてを包含してなお数十万平方キロを余すことを知った。祖父は結局シベリア脱出に成功したのだが、そのとき彼が家族を連れ戻した経路は、農場や放牧場を抜け、道なき原生林を横断し、世界でもっとも深い湖を迂回し、年間十六日を除くあとの日は晴天続きという丘陵地帯を登り、虫が群がって人畜を悩ます低地にくだり、ひどい病氣や満州虎に脅かされるいくつかの地域を通過するものだった。アレックスはもちろん、祖父から聞いたこれらの話を自分も楽しみなが微に入り細にわたってディミトロフに語った。ディミトロフが聞き惚れているのを見てからはとりわけ熱が入った。これも治療の一部だった。それが逆に格好の武器として彼に向けられることになる、だれが予想できたであろう。

アレックスの父は何年ものちに実際にシベリアにもどった。グレイブズ將軍麾下のアメリカ軍探險隊通訳としてウラジオストクを訪れたのだ。やはり自分の原点とのつながりを再発見したいという熱望が遺伝因子を通じて伝わっていたとみえる。ところがいまディミトロフはアレックスの父祖の地を餌に、文字どおり彼を氷の原野に閉じこめ、おそらく最終的にはアレックスの命をろうそくの火のように吹き消してしまふそのときまで、彼を完全に掌握しておこうというのだ。なにしろ会議までのディミトロフの健康の保証はアレックスにある。しかしそれからあとは？ 会議までもてばもう命などどうでもいい。既成事実が成立してしまっているからだ！ 二、三百万の支那人を核爆弾で吹き飛ばし、中国問題は落着だ。いくらディミトロフでもそれ以上生きていたいとは思うまい。そもそもこのような

決断がくだせるのも、余命いくばくもない人間だからこそだ。アレックスは、できることならこういった疑惑を頭のなかから一掃してしまいたかった。けれどそれができてもむだかもしれない。ディミトロフのほうでアレックスが知っていると怪しんでいる以上、それだけで充分だった。

「シベリアは広大無辺だ」ディミトロフは昼食のときそう言つて、ふさふさした濃い眉毛まゆげの下から凝視した。「寒い、おそろしく寒いぞ」

「あなたにいただいた毛皮の襟えりのコートと帽子、あれがあれば大丈夫でしょう」とアレックスはうっかりばかなことを言つてしまった。飛行機で帰るともつと強く主張すべきだったかもしれない。あるいは大統領と話をさせてくれるよう要求すべきだったかも。しかしそれはディミトロフの疑惑を確信に転ずるようなものだ。とうていアレックスを出立させてなどくれないだろう。少なくともいまは。もしかしたら永久に……。

「それもいいが、きんたまも冷やささんようにな」ディミトロフは大まじめを装つて注意した。眼を輝かせ、魅力を顔いっぱいにあふれさせている。

とはいえ、信頼する医師の旅立ちにだれもが覚える不安をディミトロフの素振りのなかに察知することができた。

「お望みなら、もっといてもかまいませんよ」ディミトロフが初めこのシベリア旅行を示唆したとき、そう答えたものだ。故意に患者の不安をおおろうとしたわけだ。むろん医師の倫理にもとること、数週間前だったら、よもやこんなことができるとは思ひもしなかったらう。

「病状は落ち着いたと、たしかそう言ったのではなかったのか？」ディミトロフは真顔で、驚愕きやうがくの色さえかすかに浮かべて言つた。とび出た頬骨の上の奥まった眼に恐怖の影が認められた。

「ただいまのところは」

「するとわしは依然として時限爆弾をかかえておるのかね？」

「爆弾の話はよしましよう」と答えたとたんに、それをうつかり口にしたことを後悔した。果たしてディミトロフがこっちの言う意味を理解したかどうか、表情からはうかがい知るべくもなかったが、情報に確実に伝達されたことをアレックスは疑わなかった。

「すると」とディミトロフは咳払いをしながら言った。「いちばん正確なところを推定するとあとどのくらい生きられるかね?」

「申し上げたでしょう」——アレックスはことばを切った——「推定はしません」

「数日か数週間か数か月かね?」

アレックスはため息を漏らした。またもや時間についての尋問だ。アレックス自身生き延びたいという気持ちを急にひしと感じはじめてはいたが、そのために嘘をつく気にはなれなかった。

「六か月から九か月といったところが平均ですが、五年も生きた人もいます」ディミトロフの眉毛がびくっと動いた。

「で短いほうは?」

「数日か、あるいは数週間」

「数日?」

「わたしは神ではありませんよ」アレックスは苛立^{いらだ}てて言った。この豹^{ひょう}のような病気はいつ跳びかかってくるかわからないのだ、と彼は考える。岩かげから身を躍^{はね}らせ、頸静脈^{けいじょうみく}にその鋭い歯をつきたてるのだ。

ディミトロフは長いあいだ黙りこくっていた。

「ともかく、あんたの居所はいつも把握^{はくぐ}しておこう」とやっと口を開いた。

「その点のご心配いりません」アレックスは用心深く言った。「もっとも、お国の列車が時刻表どおりに走ればですが」